

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	島田さんのこと
Author(s)	三浦, 一郎
Citation	歴史研究(32): 13-14
Issue Date	1966-12-18
URL	http://hdl.handle.net/10109/8000
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

島田さんのこと

三 浦 一 郎

島田さんの生前、不遜にもわたくしはよく「助教教授とは教授に助けられるものなり」などと冗談をいった。島田さんがなくなつてから、わたくしの身辺は大変忙しくなり、島田さんがわたくしが研究にはげむことができないよう忙しくならない、ように、心をくばって助けて下さったことが、今さらのようによくわかった。したがってわたくしがよくいっていたことは、冗談どころか、まったく本当の話であつたことを、身にしみて痛感している。

島田さんは非常に有能だつたから、大学では評議員その他の重要な委員をたくさんつとめ、大学の改組など重要問題のためにいつも働らいておられた。わたくしが水戸に泊る毎週火曜日の夜は、ほとんど必ず、島田家でいろいろだべる慣わしになっていた。こういう時、大学の重要な話でわたくしの知っていないてはならないことは、みな教えていただけたので、おかげで大切なことを、大体みな知ることができた。自分のやりたいことを専らして、大学の仕事はなるべく怠けているようなわたくしも、こうしてどうやら大筋を誤らないでこられた。学生や研究室関係のことなども、わたくしだけでは処置に困ってしまう

ようなことも、大胆に上手に処理して下さるので、わたくしはたいいてい何もしないで、見ていれば良いのだった。

こうしてわたくしの方はのんきに樂をしていたのにひきかえ島田さんの方は大変な忙しさだつた。その上晩年はずっと健康が不調だつた。この大学問題の忙しさが、島田さんの健康をおそねたのではないかと思う。それなのに本来なら助ける方ではなくてはならないわたくしが、助けられていたのだから申しわけのないことだつた。ひとつは島田さんが「つらい、忙しい」というような歎きの言葉を殆どいわれたことがなかつたためになおわたくしは安心して甘えてしまつていたのでつた。島田さんは大変だつた筈なのに、ゆうゆうとして振舞われていて大学問題が忙しいのに、研究の方も盛んに進めておられた。

別に掲げられている島田さんの業績表に見られるように、島田さんの仕事は大学卒業以来ずっと続けて来られた大学史関係の研究が第一であつた。その方の書物はいつも注意して集め、目を通しておられた。至文堂の「ヨーロッパの大学」は死の前年に出されたもので、いろんな点で大変不満を持つておられた。しかしなくなつてみると、島田さんの大学史研究が、こういう形で、一冊の本として残つたことが、せめてものことであつたとわたくしにはうれしい。近い中に中央公論社から出る予定のアシュビーの「科学と大学」の翻訳も最後の病床でつけられたものだつた。

大学史研究が島田さんの研究の核で、一本の貫かれた筋だつ

たが、島田さんの研究の態度は狭いものではなかった。広く海外の西洋史研究の動向にまでいつもよく注意されていたことは史学雑誌に幾つも発表された研究動向の紹介にもよくうかがわれる。最近では島田さん以上に専門に深く入りこんで研究している西洋史学者は多いかもしれない。しかし自分の研究の位置を、西洋史研究の全体の流れの中で、正當に位置づけて見ているような学者は少ない。得がたい人を失ったという感じはここにもある。

島田さんは自分の研究ばかりでなく、いろいろなことに関心を持って、広く本を読んでおられた。わたくしが「世界史のナゾ」とか「世界史こぼれ話」などのような雑中の雑のようなものを書いていた時にも、よく「こういう話はどうだろう。君には役に立たないだろうか」などと教えて下さった。その上時代の動きにもいつも生き生きとした興味を持ち、反応をしておられた。どちらかという逃避的、ディレッタント的なわたくしなどは、島田さんにひきくらべて、こんなことではいけないと思わせられることが度々あり、よく反省したものだ。

島田さんのおかげで忙しくなかったとかどうとかいう以上にこうして学問のしかた、物事への関心の持ち方、人間の生き方、そういう点でわたくしは島田さんには助けられ、教えられた。実に惜しい人をなくしたと思っている人が多いだろうが、わたくしにとってはかけがえのない人を失った感じがする。大要にぶいわたくしは、島田さんが何気なくいわれたことの意味が、今

になってよくわかったりして、「ああそういうことだったのか」と思うことが多い。

島田さんを知っている人は、多かれ少なかれ、よきかがみを見失くしたと思っていることだろう。わたくしにとってはそれはひとしおなのである。島田さんから学んだことを、わたくしもせめてその万分之一でも、自分のものにしたいたいと思っている。

島田先生をしのぶ

今 井 宏

こんなに早く、こんな文章を書かねばならないとは。

もうかれこれ二十年近くにもなる。敗戦のどさくさのなかで旧制高校に入った私が、新入生歓迎コンパの席上、演壇に上られた先生を、遠くからかい、まみたのが最初であった。そのとき、上級生の一団からあがったかけ声を、今も忘れることはできない。「水高のヒューマニスト、がんばれ!!」ヒューマニスト、この言葉は混乱と汚濁に満ちた当時の世相にあつて、何となく新鮮で甘美な響きを伝えていたことか。その後、親しくお教えをうけるようになって、「ヒューマニズム」こそは、先生の学問と生活を律するものであることが、わかってきた。しかし先生は、学問的対象としてヒューマニズムを語られることはあつても、自らは、よく世間にありがちなヒューマニストぶる